

ぶどうの木

第 11 号

目 次

巻 頭 言	榎 本 利三郎	1
前田教会に導かれるまで	正 野 員 子	2
その日 = その日	上 野 米 子	4
婦 人 会 旅 行 記	福 岡 一 女	5
エステル会の旅行に参加して	大 田 邦 子	8
親 と 子	ル デ ヤ	14
病 の 中 で	安 部 タマエ	17
今生きて働き給う	大 口 種 義	19
トンネルの中で	正 野 真 宏	22
神の国と神の義を求めて	上 島 南 明	29
数えて見よ、主の恵み	正 野 員 子	36
ヒヨコのヒヨコ	安 東 篤 良	39
指しゃぶり奮戦記	正 野 真 宏	47
お 証 し	藤 掛 邦 夫	51

八 幡 前 田 教 会
大 濠 公 園 教 会

榎 本 利 三 郎

長年礼拝を守り、喜びにも、悲しみにも、思い出の尽きない旧会堂を撤去し、新会堂が落成したのが昭和五十年三月でした。旧会堂の思い出の鮮明な間にと願つて、「ぶどうの木」第十号を「旧会堂特集号」として発行致しました。当時いたっていた原稿が、長い間冬眠をつづけて三年経つてしまいました。

「桃栗三年柿八年」といわれますが、「ぶどうの木」も三年経ちますと、又すばらしい果実がたくさんなりました。

更に主に喜ばれる果実が結ばれるよう祈つております。

前田教会に導かれるまで

正野員子

昭和十九年三男暢之が生れてまもなく、大分国東半島の父の経営する工場に四人の幼児を連れて疎開致しました。

そこで終戦を迎え、父の事業を受嗣いで経営しておりましたが、弟が大学を卒業しますと、私等と入れ替り、弟が経営するようになりました。私等は二十数年父を助けておりましたので、財産を分けていたゞけるものとはばかり思っていましたら、裸で追出され、宗像東郷の地に來てみると、農家の納屋に粗末な畳が一間あるだけでした。

それから私たちの貧乏との戦いが始まりました。長い苦難の道でありましたが、今振り返ってみますと、「苦しみに会つたことはわたしによいことです。それによつてあなたの戒めを学びました。」と詩篇のみことばにありますように、主の訓練の場であつて、主は避所となつて下さつて、守られ、三十五年五月不思議な主のみ手に導かれ、十五年ぶり八幡に帰りました。

家も戦災でありませんでした。私たちがのために家を建てて下さり、店を持つことができたばかりか、八幡前田教会に導かれたことは、実に大きな御恩寵でございました。

「この教会はキリストの体であつて、すべてのものをすべてのもののうちに満たしている方が満ち満ちているものにほかならない。」

宣べ伝えられております純福音を信じた結果家族六人が救われたのでした。

初めて前田教会の椅子に腰をおろして説教を聞いた時、私は未だかつてこれ程感動した体験はありませんでした。長男が先づ第一声頓狂な声で言いました。

「十字架つて、すばらしいなあ！ 今日初めて聞いてびっくりした。僕たち何も分つちやいなかつたんやね」と。正にその通りでした。よその教会で役員をしていた私が初めて知つたのですから。この時私たちの目が開かれたのでした。

前田教会の長老さんがかつての青年の河本さんであることを後になつて知り、少なからず驚きました。

私の父が消防組頭をしていた時、私の家によく出入

りなさつておられました。……（そこで又思いがけない事を聞きました。）……河本の奥様の御母堂さんは東郷におられ、よく存知上げておりました。九十才にもなられる方で、枕元に大きな聖書を備えて、よくお祈りなさつていらつしやいました。そして教会を捧げられたことを殊の外およろこびでした。こんな昔話を交しておりますと、その前田教会の敷地は、「正野さん、あなたのお父さんから買いましたよ」と河本長老さんがおつしやつた時、驚きでした。私の知らないうちに神様のみ手のお働きを見る思いがしました。ぶどうの木九号でお証し致しておりますように、一枚のプリントで前田教会にみちびかれたことを書きましたが、自分の家の近くの大きな教会に行かずして、見落すような奥まつた前田教会を、私は何度探しに行きましたことか、これも皆全く主のみちびきでありました。そしてその一枚のプリントは、そのおばあちゃんの家からもらつていることを……。

すべては神の御計画の内にえらばれていること等思ひ合わせると、見えない糸に導かれて一匹の迷える羊を探し求められた主の限りなき御愛を今更の如く思う

のです。

もしもよみ返りの主を知らずにいたならば、父の歩んだ同じ道を行つたでしよう。死ぬまで仕事仕事、全くの奴れいとなつていたに違いありません。

主のさとしは正しく眼を明らかにして下さつて、愚かなり共迷うことがなく、私たち一家最善に導びき給ひ、最もよき嗣業を与えて下さいました。詩篇百三篇は私の証となりました。「わが魂よ、主をほめよ、その清きみ名をほめまつれ。」日々ほめ歌う者と変えられませんでした。

主はわが歌、わが城、わが贖主、わが牧者です。

アーメン

この神こそ、その道は完全であり、
主の言葉は真実です。

主はすべて寄り頼む者の盾です。

（詩十八・三十）

その日 || その日

上野米子

― 赤蕪を通して ―

今日も出勤の家族をひとりひとり送り出して、私はいつものように独りになりました。

早く午前の家事を済ませ、座る時間が欲しい。……この時間は私の最も愛する時間で、胸いつばいいいろいろな思いがふくらむ時です。お祈り、聖書、知人への便り、その日その日の書きとめ等盛り沢山です。

毎年同じ事ながら、私共の小さな菜園に季節にふさわしい種子が蒔かれ、苗が植えられました。

毎朝早く畝をのぞく楽しみ、トマト・キュウリ・なす・隠元・ピーマン・赤蕪・唐辛子……夏野菜は夜露をいたゞき、しつとりとぬれております。なんと新鮮でしょう。……今更こんな事を考えるなんて、当然のことですが、私は畝をのぞくたび、「土は命だなあー、生きている」と思わないではいられません。

その「生」を司る方、それは全能の神様です。「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するので

ある。」(ロマ書一一) 感謝せずにはおられません。

かわいらしい赤蕪、二十日大根という名の通り成長が早く、実は大きな梅の実大にふくらみ、土から顔のぞかせた愛らしさ、その色の美しいこと……。

人間がどんな知恵をもつてしても、生きているこの色を造ることはできません。御業を成す主のお働きのみです。イザヤ書四十章の聖言が迫ります。

「なんぢら眼をあげて高きを見よ、たれか此等のものを創造せしやをおもへ。……又主はとこしへの神、地のはての創造者」と。

このかわいらしい赤蕪は、私の言葉より雄弁にしてご近所のお付合いを円満にし、皆様からよろこばれております。

私共の廻りには平凡で気づかぬことがおほごさいますが、赤蕪を愛でるいつ時の平凡さがあつてもよいのではないでしょうか。この平凡こそ神の「安き」です。「愛」です。「吾が愛に居れ」……どの一つをとつても、すべて神様のお恵みが連なつております。結ばれていないものはありません。

私は平凡こそ最大の恵みと感謝致しております。そ

して多忙な動きの中に、わずかないつ時を自分自身との対話をもち、ペンをとる時間を与えられていることは、ほんとうにお恵みと感謝いたしております。

その日、その日 六月五日より

婦人会旅行記

福岡 一女

(五月二十八日)

待ちに待っていましたうれしい旅行の二十八日がおとずれて参りました。いちばん気にいたしておりましたお天気も、朝目覚めますと晴れていましたので、思わず声を出しまして感謝いたしました。

博多駅より総勢十四人と十時二十五分の長崎行に乗り込みました。皆様とてもうれしそうなお顔で、散々互々場所は異なりましたが、しばらく楽しい雑談にふけりましたり、又美しい外の景色をながめておりますうちにお昼近くになりましたので、早目に御昼食をいたさき、又々お話していますうちに諫早に到着。バスに乗替えまして目的地の雲仙に到着いたしました。

宿の青雲荘に荷物を預けまして、いよいよ仁田峠に向いました。途中の景色の壮大さ、雄大さ、神様の成し給う業に只々目を見張るばかりでございました。だんだん上つて参りますに従つてバス道路の片側を見下しますと、思わず「主よお守り下さい」と祈らずには

国は主のものであつて

主はもろもろの国民を統べ治められます。

(詩二十二・二十八)

おられませんような断崖絶壁のけわしい道を登つて、美しい仁田峠に到着いたしました。ほんとうにうれしゆうございました。

バスから下車して見ますと、人様から伺つておりましたが、美しい色とりどりのつつじが咲きみだれておりました。只家庭のお庭に咲いておりますのとは全く眺が違います。高い高い山の上までも咲いています。先生に伺いましたら「自然なのですよ」と。

「目を上げて高きを見よや、これらのものは誰が創造せしやを思え」

とほんとうに神様のなさる業の素晴らしさにもう一度新しく其成し能わさることのない御力を深く身におぼえまして、皆様と美しい、素晴らしいの連発で眺めさせていただきますました。

ここだけでも素晴らしいのですが、ロープウェイではるか上りますと、更に素晴らしい景色を見る事ができたのですが、花田様と私は下に残りまして、他の方は全部上にいらつしやいました。下降なさいましてからのお話で、それはそれは又と見られない美しい眺めであつた事を伺いまして、少々残念な事をいたしました。

皆様とあちこちで先生からお写真をうつしていたゞきまして、見ても見てもあきないつつじの山々を眺めておりましたら、帰途の最終バスがなくなり、一寸びつくりいたしました。が、神様は折に合う助けとなる恵をいただきました。丁度下山しますバス食堂車にお年寄り三人が便乗なさいまして、先生始め私共は徒歩で下山する事になりました。

これが又素晴らしいこととございました。もしバスがございましたら、只当り前の下山でございしますが、バスがないために徒歩で下山することになりました。始は歩けるかしらと不安でございましたが、神様は力をお与え下さいまして、途中山の木の枝を拾い（お若い方が心配つて下さいまして）それを丁度羊飼の杖のようにして「楽しいですね、楽しいですね」と喜び勇んで、途中舗装道路迄下山して参りました。先生が氣をお使ひ下さいまして「皆さん足は痛くないですか、大丈夫ですか」と尋ねて下さいましたが、全然どうもございませんでした。自分ながら不思議な位でございました。そしてタクシーに乗替えまして宿に帰つて参りました。

宿も当日は借り切りのように静かでございますして、何もかも恵まれ通してございました。感謝の中にお夕食をいただき、お風呂に入りまして疲れを取去つていただき、五部屋に三人づつゆつくりと御部屋をいただきまして、八時に先生のお部屋に集合、夕拝をさせていただきますました。

聖書ガラテヤ書五一六、ヨハネ十四一二十一、エペソ三一十二、讚美歌もたくさん歌いまして、十時半迄神様を讚美いたしました。各自部屋に戻りました。夜も神様のおまもりの中によく眠らせていただきました。

(五月二十九日)

目覚めましたら雨でございましたが、普通でしたらがつかりする筈でございますが、「すべての事感謝すべし」と少しも気になる事もなく、又雨の景色も素晴らしいものでございました。町中では到底聞くことのできませんウグイスが鳴きまして、私共を楽しませてくれました。早速朝風呂をいただきまして、七時半より朝礼をしていただきまして感謝でございました。旅先で礼拝ができます等キリストを信ずる者でなければできない御恩寵と深く感謝いたしました。

聖書エペソ一・三一十四、十五、十六、十七、十八、十九

「私のいましめを心にいだいてこれを守るものは私の父に愛されるであろう」

どうか御霊のお助けによりまして主の御いましめを心にいたゞくものとなりとうございます。

朝礼を終えまして朝食をいただき、雨でございますので、タクシーでカクレキシタン、島原城等見せていただき、昼食は島原名物の具雑煮をいただき、皆様とてもおいしかつたらしゅうございます。それから島原港に向いまして、それぞれ土産物を手に入れました。名残りつきぬ雲仙をあとにして、連絡船で帰途につきました。大牟田港で下船。急行電車に乗り替えまして皆様ともサヨナラいたしました。

この度の旅行で神様が偉大なお方、愛のお方でありますことをつくづく身にしみて感じさせていただきました。そして主にある者同志が如何に心一つにして何事も主に依り頼んで行ける事を感謝いたしました。

こんな素晴らしい旅行をさせて下さいました神様に心から感謝いたします。

以上

エステル会の旅行に参加して

大 田 邦 子

今年のエステル会の旅行は、有志の方々々と五月十三、十四日に、えびの高原に参りました。

昨年は由布院に参りまして楽しい旅をさせていたゞき、今年は何処にしましよかとお話して居りました。都城の丸山さん宅の新築感謝会で先生方と一部の方がいらつしやることを伺い、この機会にエステル会が便乗、出席させていたゞき、宮崎か霧島を廻つてはという案が出ました。でも大勢で丸山さんにご迷惑おかけしてもと、その上、片道七時間余りという長い汽車の旅です。今は東京迄六時間のスピードのご時世、いろいろ案が出ましたが祈つて待ちました。丸山さんからも「喜んでお待ちします」の懇なご返事もありません。大挙して押しかけることに決りました。

榎本先生ご夫妻に野村さんと会員十名、平均年令五十八・七才ということになりました。どうか恙ない旅のできますことを切に祈つて参りました。

いよいよ当日、朝は快晴でまず感謝しました。

はずむ心で黒崎駅に：：：八時二十二分発にちりん二号で、途中戸畑、小倉で合流し、明るい顔の勢揃い、学生時代に返つての修学旅行の始まり、さあ南九州に向け走り出します。

車窓の景色は、もう初夏の装い、殊に日南海岸は明るい陽ざしで夏の色です。約六時間で宮崎着。こゝで急行「錦江三号」に乗り換えました。この急行では大変なつかしさを覚えました。古めかしい車輦に、勿論冷房などなく、乗り合わせたお客さんの会話も、聞き馴れないアクセントに、誠にのんびり調。一様に開けられた窓からの風も生あたくかく、汗ばむ心地、何だか忘れかけていた昔の旅を思い起させてくれた一時間でした。懸念されました七時間余りの汽車の旅も何のその、楽しいお話もはずみ、疲れを覚える間もなく十五時四十分に都城に着きました。

駅には丸山の奥様達が迎えて下さいました。明るい笑顔に賑い、木の香も新しい立派なお宅にご案内いたゞき、くつろがせていたゞきました。

間もなくご用を済ませ、空路でお着きになられた榎本先生ご夫妻、途中鹿児島からご参加の三好さ

ん、お迎えの丸山さんと全員揃い、俄然活気づきました。先生方は途中桜島の爆発に逢われましたとか、九州に来たのだなあと、新たに旅情が湧いて来ました。全員無事到着しましたことを感謝致しました。

丸山さんのご新居は、ご趣味を生かして、竹を取り入れられた落ち着いたお宅、隅々まで行届いた設計、ご夫婦で力を合わせ材料を吟味され、竹一本から磨かれましたとか、会堂新築の頃が思い出されました。

しばらくご苦心談とお証を伺いました。会堂新築のご用を終えられ帰阪されます時は、都城での新築など夢にも思つていらつしやらなかつたそうで、ご自分の計画とは、全然異つた道に導いて下さいました神様のご計画、み業の素晴らしさを感謝していらつしやいました。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、

わが道は、あなたがたの道とは異なつていと

主はいわれる

天が地よりも高いように

わが道は、あなたがたの道よりも高く

わが思いは、あなたがたの思いよりも高い

イザヤ書五十五

のみ言葉通り、しみじみと神様のなされる不思議なみ業をこゝでも見せていたゞき、私達も恵まれました。お夕食はお心こめてのおもてなし、高橋さんの見事なお腕前で大きな船に盛られました鯛の生づくり等。忘れられないのが、美味しかつたお煮べのお味、盛られましたお皿が、皆さんの間を行つたり来たりの人気がございました。本当にご馳走様でした。

夜は丸山さん御一家にご新戚の方々を交え、感謝会が持たれました。

讚美歌 二七一 を感謝しつつ歌いました。

主に感謝せよ、主は恵みふかく

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない

もろもろの神の神に感謝せよ

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない

もろもろの主の主に感謝せよ

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない

ただひとり大いなるくすしきみわざを

なされる者に感謝せよ

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない
知恵をもつて天を造られた者に感謝せよ

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない

詩篇一三六

のみ言葉をいたゞき、感謝致しますと共に、主の前に今一度、姿勢を正させていたゞきました。

丸山さんご一家のこの地でのご使命をお祈り申し上げます。

三好さんは鹿兒島にお帰りになられ、私達は明日の行動の打合わせを始めました。そして希望を申し上げますと、丸山さん達は、エステルの顔ぶれをご覧になり、えびの高原は予定の時間では疲れるので、一寸無理ではないかと、ご心配下さいまして、近くの関尾の滝にゆつくり遊んではこの事でしたが、強引にえびの行きをお願いしました。早朝八時三十分出発にきまりました。

夜のお宿は、家主さんの丸山さんご一家を追い出し、前田教会のお客さんが占領、奥様達が私達の為に新しく調べて下さいました枕やお布団で、ゆつくり休ませていたゞきました。

翌日は快晴の静かな朝でした。

おじい様、おばあ様もお元気なお姿をお見せ下さいました。そして、おばあ様手作りの素朴な、この地方独特の珍しい、あく巻とおだんご、何よりのお土産を頂戴しました。心あたゝまる思いで感謝していたゞきました。

いよいよ出発。車を四台ご準備下さいまして、運転は、丸山さん、弟さん、高橋さん、甥ごさん。皆さんニコニコとたのしい雰囲気の中で、私達もはずむ心でそれぞれ乗車。お見送りの方々に心から御礼申し上げます、八時五十分一階、えびの高原へ……
出発してすぐに、田植えされてまもないたんぼ道を縫つて、緑の山々にさしかゝります。

緑濃い老木の杉木立の間から、やわらかな、それぞれの装いをこらした新緑が、太陽に照り映え輝いている風情、この緑のコントラストの素晴らしさが、五月の爽やかさを感じさせてくれます。

山深く走り間もなく車を降りますと、うつそうとした木々の茂みから、滝壺周辺の独特の轟々という響きと、冷気が漂つて参ります。思わず足を早めて降りま

した。そこには大小幾筋もから成る滝が、雄然と美しい姿で落ちていきます。南国にふさわしく明るい感じの滝でした。しばらく、緑と岩と水の美しさを眺めました。更に奥に入りますと、つり橋がかゝつてました。少しばかり揺れるつり橋の途中まで、慎重な足どりで渡りました。川上に参りますと、童話にでも出て来そうな明るい風景が広がります。川の流水で浸食されてきた、平らで丸ろやかな岩、穴のあいた岩など、思い思いの形ですつと続きます。思わずピョンピョン飛びはねて渡りたくなるような、岩、岩、岩：：又、かわい、石の橋もかけられています。まずこゝで記念撮影をしていたゞき、珍しい岩や景色に見とれてますと、「急いで下さい、先が遠いので」との丸山さんのお声に、関尾の滝とお別れしました。

やがて高千穂河原に到着。車を降りますと、鮮やかな赤の霧島つゞじが迎えてくれます。「標高九七〇m」と彫られた石の前で記念撮影をしていたゞき、しばらく周囲に開けた雄大な霧島連山の景色を楽しみました。横手に鳥居を見て、ふとなつかしさが、頭をかすめます。それはいにしへの神話や、戦前、紀元節に歌いま

した「雲にそびゆる高千穂の、高嶺おろしに草も木も……」の歌でございました。

そこから霧島スカイラインを通つてえびの高原へ。スカイラインでは車窓より、老樹の生い茂る原生林の美しさを、心ゆくまで満喫させてくれました。

待望のえびの高原に到着です。車から一步踏み出しました途端、思わず「おゝ寒い」の声。皆さん慌てゝ重ね着を始めました。標高一二〇〇m、下界より気温が十度位低いそうです。硫黄の臭いが鼻をつきます。しばらく歩きますと、見渡す限り、すゞきの立枯れた姿がつかまします。ところどころから、硫黄の煙が立ちのぼるこの荒涼とした風情、遠く周囲はなだらかな緑の山々です。えびの高原ならではの美しさを見せてくれます。秋ともなれば、このすゞきが一面美しい穂波に揺れ、訪れる人々を楽しませてくれる事でしよう。何処かこの荒涼とした景色に心ひかれました。

神様のみ手の中にあります自然の手ごたえのようなものを感じたからでしようか。

私も人生の黄昏どきにさしかゝつて来たからでしようか……。

つい先日、新聞で知つたのですが、これ等のすゝきが八月下旬ごろともなりますと、硫黄のガスの影響でエビのように赤くなつてなびくので、そこからえびの(蝦野)の地名がついたとか、大変おもしろく読みました。韓国岳、中岳などをのぞみながら、バスターミナルに着きました。

ここからなだらかな、つゞじが丘に散策しました。まだとても寒く、松林を通り抜けますと、沢山なつゞじです。まだ眠つてました。やつと雪が溶けたばかりとか：。でも申訳なさそうに、あちらに二、三りん、こちらに四、五りんと、ピンクのとても可愛い花を付けて見せてくれます。まだ早春のたゞずまいでした。六月ともなりますと、全山ミヤマキリシマが「雲のじゆうたん」ならぬ「ピンクのじゆうたん」を敷きつめたようになりすとか。残念ながら幻想に終わりました。

でも足元に目をやりながら歩いて参りますと、二、三の野草が芽をふき花をつけ、やわらかな春の息吹を感じさせてくれます。綿ぼろしをつけた「ぜんまい」や、中でも「霧島りんどう」が、其処此処で、紫の可憐な姿で精一杯の観迎をしてくれました。本当に楽し

い散策でした。

バスターミナルに戻り、昼食をすませ一休み、元氣を取戻しました。

次は思いがけなくも硫黄山に案内していたとき、少々お年のエステル会員ですが、賽の河原に頑張つて登ることができました。荒々しい岩石ばかりがゴロゴロし、硫黄のガスがすごい音をたて、噴き出しています。登りつめると広大な景色が広がります。遠くには連山がゆるやかなスロープを描き、右手に松林、点々とホテルや国民宿舎の赤い屋根、又草木のない荒地など変化に富んだ景色です。そして魅せられましたのが、眼下に眠つた「不動池」でした。小さな池ですが、緑に囲まれ静寂そのもの、湖面は青く、ところどころの濃淡のエメラルド色が一層美しく、神祕を漂わせて静まり返つていました。

このスケールの大きい静あり、動ありの素晴らしい自然の景色、さわやかな空気と青空、創造の神様の演出をしみじみ味わわせていたとききました。感謝のひとつでした。名残りは尽きませんでした。が、えびの高原とお別れし、山を降りました。

北霧島有料道路に入りました。途中、太古をしのばせてくれる風格ある赤松林の壮大さに驚きました。

いく曲りもする山路を降りて参りますと、しばらくして、花の茶屋とかで車を降りました。こゝは穏やかな春の終りの感じですよ。まず重ね着を脱いで、新芽を揃えたやさしい草原の小高い丘で一休み。つゝじが咲き、下の方には一面菜の花が春の名残りを止めておりました。こゝは秋になりますと、コスモスが一面咲き乱れますとか。四季折々訪れる人々の目を楽しませ、和らげてくれますこれらの花の管理は大変なことでしょう。こゝでは、えびの高原の自然の厳しさとは対照的にのんびりと安らいだひとときでございました。

これから車は一路、小林を通つて駅に向け走ります。途中、前田さんと小林でお別れし、宮崎に入りましたところが、今まで四台の車が仲よく連ねて走つて居りましたのに、一台が見当らないので、平和台公園前に停車し確かめました。一台が迷子になりましたのか、三台が迷子になりましたのか、何処でどうなりましたか、わかりませんが、時間がないので、とにかく宮崎駅に急ぎました。心配してました一台は、ちゃんと先に到

着してまして、後の車を気づかつて下さつていたとのこと。お互いに安心しました。

駅では、丸山さん方とゆつくりお別れする間もなく、慌しく、宮崎発十八時十分「にちりん八号」に乗り込みました。

帰りの車中では、皆さんお疲れの様子もなく、笑いやおしゃべりの交錯、讚美歌の歌声も流れる程のお元氣さ、無事小倉、戸畑と、そして二十二時黒崎に帰つて参りました。

丸山さんご一家には、二日続きで、しかも長い車の旅、さぞお疲れになられたこととございましたように、何時もニコニコと喜んでご案内いただきまして、本当にありがとうございます。

おかげさまでエステル会の有志の方々ともゆつくり心置きなく、すべてお任せしての旅を楽しませていただき、御礼の言葉もございません。感謝でいっぱいでございます。丸山の奥様は、大挙して押しかけました私共のため、お心くだいてのご準備で、お疲れになられましたので、幾度となく「こうしてお目にかかれたことが夢のようです……」と喜んで感謝して下

さいました。うれしゆうございました。

この旅が始めから終りまで、主のみ手に守られて、終えさせていたゞきましたこと、いい尽せない感謝を聖前にお捧げしました。

丸山さん御一家の上に、主の御祝福が豊かでありますより、お祈り申し上げ、拙い旅行記を終らせていただきます。

主を待ち望め、強くかつ雄々しかれ、
主を待ち望め

(詩篇二十七：十四)

親 と 子

ル デ ヤ

三匹のビューマが、捕獲車に追われて、命からがら逃げています。目にも止らぬ速さで疾走していますが、性能良きエンジンを持つ車にはかないません。だいぶん疲れが目立つてその距離はだんだん縮められてゆきます。

私はテレビの記録面を息もつかずに見ていました。一体どうして捕えるのであろうか、興味深々でした。よく見ると何十キロか先にアミが張りめぐらされてあり、捕獲車の外に、馬に乗つて待機していた二人の騎士がはさみ打ちするような恰好で、アミからはずれないように迫るので、絶対絶命、仕かけたアミの中に入らねばならぬようになつていたので。遂に二匹共アミに引かかりました。すると二人の男が車から飛び降りると、一人は頭からすばやく首輪をかけて、胴体が引つくり返ると、一人は尻尾をつかんで、横付けされた幌馬車に一匹放り込まれてしまいました。もう一匹も同じように捕えて、同様に放り込まれました。幌馬

車の中は暗いので、却つて安心したのか、疲れ果てたせいなのか、静かに横たわつて、あばれる様子はありませんでした。その間に残る一匹はアミの目をくぐり抜けて逃げてしまいました。ところがどうでしょう。その逃げて行く一匹のビューマを、二匹の猟犬がどこまでも追いつめ、逃げ場を失つたビューマは、高い木に登りましたが、下では猟犬がほえ猛りますので降りることもならず、とまどつているところを、棒を持つて馳けつめた男がたゞき落しましたのでたまりません。地面に、もんどり打つて落死したかと思いきや、下にはアミがちやんと用意されており、かすり傷もなく生けどりにされました。誠に水も漏らさぬ人間の智慧に感服してしまいました。如何なる猛獣も人間の智慧にはかないません。

「神はご自身の型に人を創造し、海の魚、空の鳥、家畜と、すべての獣とを治めさせよう」創生記のみことばを思い起しました。

猟犬の烈しいほえる声がしました。何か又獲物を見つけたらしい。今度は何でしょう。見ると、拍子抜けする程可愛い、小さい二匹の赤ちやんビューマで

した。左右からほえ知らせていました。二匹の子ビューマは寄り添つてふるえているようです。しかし猛獣の子ですね、逆毛を立てて歯をむき出して抵抗しているのです。私は涙の出る程かわいくて、猟犬から助けてやりたく思いました。そこへ棒切れや捕獲道具を持つて二人の男が馳けつけて来ました。金もうけの為に、この子供まで捕え連れてゆくのでしょうか。二人の男は互いに顔と顔を合せて、かわいいなあというようにやさしいまなざしで、二人共しやがんで、何やら話合つているようですが、私には何が起るのか見当もつきません。

やがて二人が立ち上ると、くるりと背を向けて幌馬車の方に馳けてゆくと、生けどりにした三匹の内の一匹を解き放してやりました。私は、どうして苦心して生けどりにしたビューマを解放したのかわかりませんでした。

次の瞬間その一匹のビューマが走り出して、赤ちやんビューマの所に来ると、子供の頭から体をなめ廻しているのです。母子らしい二匹の子は母親を見て喜々として母親の足元でじやれついて、うれしくてたまら

ないようです。猛獣といえども、親子の愛情に変わりはありません。人であるならば抱きしめ、しばし言葉もなく、うれし涙にくれ、共に救つて下さつた方に感謝したに違いありません。

箴言に「脱穀している牛に、くつわをかけてはいけない」とあります。もの言わぬ動物さえあわれんで、くつわをはずして、充分に食べさせて、働きに報い、酷使してはいけなさと、主はおつしやいました。五羽の雀は二アサリオンで売られておるではないか、しかもその一羽も神のみ前で忘れられてはいない。あなたがたは多くの雀よりも、まさつた者である。〃

どうしてあなたがたを見捨てることがあるうかと：。見捨てるどころか、自分の半生を省る時、神に逆つていた私でしたから、捨てられても当然の者をあわれんで下さつて、その罪どがを許し、平安といのちを与えて下さいました。苦しみや喜びと歌となり、乏しきを満して下さつたのみか、愚かなりとも迷うことなき勝利の道、永生に行き詰らない人生を歩き続けておるばかりか、その道が天国に行く只ひとつの道であることを知っております。私は永遠の命につい

て、書きたいことが沢山ありますが、又の機に書くこととし、ビューマ親子の奇蹟的に救われて会うことができ、平和と喜びに満たされましたように、子は親と共にいる所が天国であります。私等も幹なるキリストにつながつて、共におらしていただく所が天国で、この宝を土の器に持つています。

「あなたはおわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない」と。

私はいつまでも主の恵みを一ツ一ツ数えながら感謝は尽きませんでした。

わたしは信じます、生ける者の地でわたしは主の恵みを見ることを

(詩篇二十七・十三)

病の中

安部 タマエ

「たとい軍勢が陣営を張つて、わたしを攻めても、わたしの心は恐れない。たどいにくさが起つて、わたしを攻めても、なおわたしはみずから頼むところがあ

る」(詩二七・五)

昭和四十九年三月十九日、保護世帯となる。

二十日、二十一日も腰痛あり、暫しの間お祈りして癒さる。

四月十二日、午後二時頃より体が倦怠を覚えるのに洗濯をする。終つたとたん腰が二つに曲つてしまう。寝たまま何もできない。食事寝たまま、両便も苦痛を忍んで座敷で壁に背中を当てて……。ヨブ記三章一節「ヨブは口を開いて、自分の生れた日をのろつた」……そんな思いが瞬間的走つて去つた。

十四日朝、引きずつていた左足が少し上つた。市立病院に連れて行かれる。車椅子に乘せられてほんとうに楽だ。願つてコルセットをいたゞくためにギブスをしてもらう。温くて気持がよかつた。背骨が伸んだよ

うな気がする。

先生がこのような病人の療養所にはいるように勧められたけれども、主人は「私が介抱します」とはつきり断つた。その日帰宅して電灯を消すことができた。

十七日、右足もあがる。背も伸びた。座することはできないが、夜は座椅子にかけることができた。

十八日、座つて食事をする。便所に行くことができた。ありがたいことだ。普通の椅子に腰掛ける。良いあんばいだ。

五月四日、後で考えたら、前々日の夕食に饑のすみそあえを食べていた。内またがかゆい。夕方には全身に広がる。体温は普通だ。電車をはさんで大村医院にかかる。注射を受ける。下剤と塗布剤をもらつて帰る。五日、貧血を起す。二回大村医院に行つて注射を受ける。帰宅して又貧血をおこす。目がぐるぐる回る。胸がむかむかする。

六日、注射はやめて睡眠剤をもらう。よく眠る。鏡の人相ははれて赤黒く別人のようになる。

十日、榎本先生御夫妻が見舞いに来て下さる。かしわ飯といちごを二人分。そしてお祈りしていたゞく。

十一日、病院でコルセットをいたゞく。二センチ位長し。

十六日、教会へ行くことができた。神様のお恵みを感謝する。

十七日、コルセットを調節に出す。

二十五日、コルセットを付けていたゞく。

五十年四月七日、神様のお恵みで何ともなく安穩に暮せたのに、又腰痛が始つた。着物が多かつたためか、冷え込んだためか、今度は加えて右の腰の前後、横側が動くたびに鈍い痛みを感じる。主人にかいろ灰を頼むが買つてもらえない。

二十日、電気火燵を前後横と移動させて温めた。翌日も少し快方に向つたよゝな気がしたので続行することにする。

二十二日、取り立ての赤貝を近所の人からもらつたので、ゆがいてすみそで食べた。遅い朝食だつた。昼前から首、手足の出ている所がかゆい。はつしんが出た。以前より軽かつた。

二十三日、ソーダ水を飲んだ。

二十四日、午後教会に電話する。先生がお出になつて、「お祈りします」とおつしやつた。

二十五日、はつしんのかゆみも気にならないで全く好調。午後テレビ体操を見て足が上にあがらないのに気づき、痛いがやつているうちにあがるようになり、神様のお恵みを感謝いたしました。

二十七日、岩井さんが見舞に来て下さる。ありがとうことだ。

五月七日、教会で礼拝することができた。腰痛の時には食中毒を起す程体力が弱るものだと感じました。＼わたしは知ります。あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできなことはないことを。＼：：：

(ヨブ・四二・二)

主はほむべきかな、
主はわたしの願いの声を聞かれた。

(詩篇二十八・六)

と言つてゐるのだからか」と思いながらも急いで階段を下りて見ると、力は車を載せる甲板になつてゐる鉄の床にうつ伏せに倒れていました。瞬間私は「しまった、これは大変な事になつたぞ、死ぬかもしれない」と思いました。そして「神様、助けて下さい」と叫んで祈りました。一寸の間はぼろ然としていましたが、すぐに側に膝を付いて、左手を額の下に敷いて、右手で背中をさすりました。誰かが「顔から血が出てゐる」という声を聞きました。血の中に顔をうつ伏せて異常な呼吸をしていたので。又、「救急車を呼びましようね」という船員らしい人の声もして、割合に早く救急車が来ました。頭を打つてゐるので、余り動かさないように救急車の来るのを待つより外はありませんでした。十分もたないうちに救急車が来て、その医師は状態を観察しながら「後頭部もだいぶ打つていますね」といいながら、素早く担架で車に運び、応急処置をしながら病院に着きました。

考えますと、はつきり目も覚めない状態で階段をとんとんと下りたので、二つ目の階段の六、七段目からふーつと貧血を起したらしく、頭部は三メートルほど

の高さから鉄板の床にぶつけたのです。

病院で裂傷箇所を五針ばかり縫つたあとと横向けにした時に、飲み下してゐたらしい鼻血をだいぶ吐血しました。頭部のレントゲンを取つたのち病室に運ばれました。そして二時間ほどかかる一回目の点滴注射をしました。

昼頃まではまだ意識はもうろうとして、時々目を覚めます毎に、意識を回復して行くようでしたが、食事はその日一日何も食べませんでした。午後二回目の点滴注射をする時レントゲンの結果がわかりましたが、異常は無いとの事でした。

一応の処置が終つて、お祈りをしていただくために前田教会に電話を致しますと、榎本先生は宮崎地方へ伝道旅行のために今朝お出掛けになつたとの事でしたので、お留守を預かられる伊規須先生にお願いして、又別府の東先生にもお祈りをお願い致しますと、早速車で駆け付けて下さつて、私達を力付けお祈りをして下さり、「何か困つた事があつたら何でも言い付けて下さい」といつて帰られました。そして少くとも数日間入院しなければならぬとの事でした。

夕方、東先生が再び見舞つて下さつてお祈りして下さいました。お願いして私だけ泊めていたゞく事にし、いつしよに車で連れて行つていたゞきました。二階のお部屋に案内されると、応接台の正面に誰かがすわつておられました。私はその時「おや、誰かお客様があつたのかな」と思つて、その方に「お世話になります」といい、少し離れて横に先生がすわられましたので、お二人に今までの事情をお話し致しました。先生は、「大変でしたね、けれども神様はいちばん良い事をなして下さいます。又、傷も後遺症も完全にいやして全く新しくして下さいます」と、それは気休めではなく、自信に満ちたお言葉でした。もう一人の方はたゞうなずいて「安かれ」といわれたように思います。

奥様がお帰りになつて、その部屋で私だけ大変なごちそうの夕食をいたゞきました。まもなく数名の信者さんが集まられて、祈禱会が持たれ、皆さんが力のいやしのためにお祈り下さいました。そして、先生の御子息信治ちゃんに表わされました素晴らしい御業を感謝讃美いたしました。信治ちゃんは非常にお元気で、明日一年生に入学されるのです。信治ちゃんは小さい時

から心臓の病気で、そのままにして置けば二十才くらいまでの寿命だといわれていたそうですが、昨四十九年五月に手術をされました。麻酔をかけて眠らされ、時間をかけて体温を徐々に下げ、手術中は氷詰め状態で八時間の長い手術だつたそうです。それから又、徐々に体温をあげて、正常になつたとき、心臓にショックを与えて鼓動を起させたのだそうです。本当に新しく立派な健康体とされておられます。

祈禱会のあと、又二、三名の信者さんとごいつしよに力を見舞つて祈つて下さいました。考え合せますと、丁度この時刻には前田教会でも多くの熱心な先生方や兄弟姉妹方の祈禱会が持たれ、又、力の事についても熱心に祈つて下さつた事を知りました。更に私が（東先生宅に）おじやました頃、伝道旅行先の榎本先生にも連絡が付き、力の事をご心配下さり、お祈り下さつた事を知りました。

考え合せますと、主に連なる身とされました喜びに感謝と感激の涙が溢れました。私達のようなつまらない者のために、こんなにも多くの先生方、信仰の先輩の方々を通して、真心からの愛といつくしみを賜わり、

あの時死んでいても仕方のないほどの事故であつたにも拘らず、僅か五日間の入院で、後遺症も無く、何の支障も無く、入学式から間借りして大学に通学できるようにになりました事で、本当に神様を見せていたゞき、イエス様にお会いできまして、感謝と喜びでいつばい
です。

「トンネルの中で」

正野真宏

主はその民の力
その油そそがれた者の救のとりでである。

(詩篇二十八・八)

ちよつと古くなりますが、昭和四十八年二月の初めから約一カ月半ばかり我家は、暗いトンネルの中を通りました。暗いトンネルというと、大きな試験を連想されるでしょうが、そうではありません。今日まで神様のあわれみで平穩無事を毎日を送らせていたゞいたその家庭生活に波風が立つて、ちよつと足がふらついたと思われたらよいでしょう。もともと私達は人並みはずれて弱い者なれば「弱れる芦を折ることなく、けむれる灯心を消すことなく：：とあるように、神様はあまり大きくない問題を与えてくださったのだと思えます。それでも私達は四苦八苦その中を通つたのが実情です。

そもそも事の起りは、一月の中旬から柄にもなく役所の昇任試験のために勉強らしきものをやり出したら体の方がびつくりしたのでしよう。途端に風邪を引いて寝込んでしまつたのです。

えゝ、私の方は神様のあわれみで三日ばかりで治り

ました。それでも三十九・五度という高熱に頭痛と腰痛にみまわられてきつうございました。私も年に一、二度は風邪を引きますが、今度のような高熱は初めてです。それでも日頃と変らないくらい食事をしますので、家内はびつくりしていました。(誰です。やせの大きいなんていつてる人は：)それまで、薬は飲んでいませんでした。氷枕で頭を冷やすだけで、あとは神様の手にゆだねて、ゆつたりと安静にし、栄養を取っておれば大丈夫と思つていました。

すると家内は「あなたは神慮でいつても構いません。けれども、もし子供達にうつたらどうするのです。パパの所へ行つてはいけないといつても子供ですから限度があります。」という。なるほどそれもそうだ。子供の病気は自分の病気以上に気を使う。それに風邪は人にうつることが事実なれば、いくら神様が守つてくださるとはいえ、これを未然に防ぐことも大切なことである。またその智慧を神様は我々に与えてくださつていると考え、お祈りをして熱さましを飲みました。すると薬が祝されてグングン効いて翌朝は熱が下りました。頭痛と腰痛から解放されたこの喜び、起きて

も何ともありません。

ところが、その日の晩、のぞみちゃんが発熱しました。時すでに遅かつたのでしようか、あるいはこれも神様の導きなのでしようか。のぞみちゃんが治るか治らない内に、今度は家内が寝込みました。私も仕事の忙しい最中でしたが休暇をもらい、家事手伝いです。何処に何があるやら、みそ汁はどうして作るやらさつぱりわかりません。一つ一つ家内に聞きながらするのですから、家内もゆつくり休めないし、私も一日で音を上げたくありません。

幸い一日で熱が下りましたので、勤め(八幡製鉄所病院のパート)に出ました。そして家に帰つてたまた洗濯、かたづけを一気にやつたのです。これが無理になつたのではないでしようか。再発して今度は激しい咳にみまわれました。それもたゞコンコンというのではなく、腹わたでも吐き出すのではないかと思われるくらいです。

その時家内は、妊娠四カ月です。お腹に力が入らないうちに、体を丸めて咳をしていましたが、どうしても力が入ります。

家内の再発に歩調を合わせるように、それまで一人頭張っていた謙ちゃんがダウンしました。二つの寢床が敷かれました。私もそうそう休めません。遂に海老津の母に SOS を発信しました。親とはありがたいもので、喜んで駆けつけてくれます。しかし、病人の看病に食事の世話、勝手のわからない家で大変苦勞をかけたと思います。それに我家は山の上にあつて、買物の毎に百三十段の階段はかなりこたえたのでしよう。少々疲れてきました。漸やく家内の咳が少しおさまつたので帰つてもらいました。

謙ちゃんの方もひどかつたけれども、すつかりよくなつてやれやれこれで我家の風邪騒動も終りになつたわいと一息入れようとしたところが、どつこいそうは問屋がおろしてくれません。

二日ほどして少量ですが家内に出血がありました。翌日、医者に見せたところが、流産の恐れあり、一に安静、二に安静が必要なることを言われたと勤め先に電話がかかつてきました。

流産：：：何度も耳にした言葉です。妊娠のたびに流産する人もあります。けれども私達には関係のない

言葉のように思えました。家内は健康だし、前の二人の時も何の異常もなく出産することができたのですから、今度も立派な赤ちゃんが生れてくると、当然のよりに神様の祝福を祈っていたのです。

流産という言葉が（チョット大げさな表現をすれば）爆弾のように私達に打込まれました。電話で話す家内の声は涙声です。泣いて良い結果が生まれようか、神様はあわれみ深い方なれば、何処までも信頼してゆくのが我らの努め、また勝利の秘けつなるゆえに神を見上げるほかぞなき。すぐに帰りて休むべしと電話を切りました。

とは言つたものの、家内に寝込まれるのが一番困ります。母にまた来てもらうほかはありませんが、今度ほどれくらいかかるかわかりません。長期にわたれば母も疲れるだろう。よし、海老津の方へ行き、一家ごとまとめて面倒を見てもらおう：：：と勝手に決めてその旨母に頼み、また祈つてもらおうべく教会にも連絡しました。

私としては、一週間ほど安静にしておればきつと神様が祈りに応えてくださる：：：そう考えての措置で

した。衣類から子供の遊び道具までトランクにつめ、近所の人に後事を託して家を出ました。

二月二十一日だつたと思います。

海老津での生活が始まりました。私は海老津から小倉まで汽車通勤です。

三日程して、急に謙ちゃんがまた発熱し、四十度を越えました。そして耳が痛い痛いといひます。翌日お医者に見せたところが、やはり中耳炎からの熱で、鼓膜が破れていないのが具合がわるい。治つてもまた再発することでした。それからしばらく謙ちゃんも耳が遠くなつて大きな声で言わないと寝床の中から、「はあ？なんね：：？」といつて何度も聞きかえします。パパが勤めから帰つてきて自分に話しかけてくれるのが、いかにもうれしいといつた顔つきで聞きかえず姿はいじらしく見えます。それに、自分が中耳炎になつて耳が聞えなくなるかもしれない——そんなことちつとも心配していませんよ。パパ、あなたに信頼しているのです。——そうゆう顔に思わず「ハッ！」とさせられて、何とかしてやりたいと親心をかりたてらされたのでした。

さて家内の方はいつこうに出血が止まりません。一週間以上も止まらないのは、ブドーン子か何かの異常によるものかもしれないから入院した方がよいと医師から勧められ、二月二十七日製鉄所病院に入院しました。

そこでまた一週間様子を見ましたが、やはり止まりません。もはやこれ以上出血しては胎児が育ちませんからおろしましよとの宣告です。

この一カ月ばかりは次々と病氣続きで、まるで神様は私達を的のようにして責めておられるように思えます。ヨブほどではないにしても、悪魔が取りついて次々と痛みつけているようです。

私達は今日までたゞ流産から守られて、元気を赤ちゃんが与えられることを楽しみにして、それを待ち望み祈つていました。今、その望みも取り去られたのです。私達は文字通り失望しました。否それ以上に祈りが応えられなかつたということが、私達の心を悲しませました。今度のように次々と（世的に言えば）不幸続きを近所の人達は何とどうでしょう。あの家は若いのに熱心に信仰しているけれど、あんな目に会い遂に

は流産、信仰しても何にもならんねという声が聞えてきそうです。だから主よ、あなたの栄えをあらわし、我らに勝利を与えてください。状態は悪くとも、あなたはよく奇蹟を行い給うお方です。どうぞ彼らの口をしてあなたをあがめしめてください。そのようにも祈つてきました。

けれども、私達のこの願いもまた捨てられました。

神様は私達に背を向け、冷たく扱っているように思えました。祈つても祈つても信仰が持てません。私達はこのままどんどん暗い所に落ちてゆくのもしい。もしかしたら家内の手術も失敗に終り、変なことになるかもしれない——そんな考えが頭の中をかすめます。

今、私が祈るこの祈りもしりぞけられるのでしようか。……………

否、否、神様は、私達の祈りをしりぞけられるのではない。神様は、全能者にして「すべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでもできないことはない」(ヨブ四十二・二)お方である。私達は神様の前には陶器師の手にある粘土のようなもので、いか

なる取り扱ひを受けても汝なんぞしかするやというとはできない。たとい、私達の祈りに神様が応えずとも、また私達を役立たずと捨られても、どうして文句が言えまじようか。すべて神様のあわれみによつて生かされていること、そして神様は善にして善よりなし給わない方である故に、いつでも神様の大能のもとに自らを低くしていなければならぬことを示されました。

また、私達は、奇蹟的なことが起れば神様の栄光が表わされると考え、それを神様に押しつけようとすけれども、神様は違つた方法をもつてご自身の栄光を表わされる。これはヨハネ十二・二十八で教えられました。

手術は三月三日午前十時から行われました。その日は休みを取り、手術に付き添うことにしましたが、うかつにも汽車に遅れ、病院に着いた時は手術は終わっていました。手術はうまくいったとのことで一安心しました。しばらくして看護婦さんが包装した小さな包みをくれました。何かと思つたら胎児であるとのこと。四カ月以上の胎児は死産となるので区役所に死産届を

し、火葬認可証をもらつて火葬しなければなりません。その包みを受け取つて手にしましたが、どうみてもその中にわが子が入つてゐると思えませんでした。けれども車に乗つてその包みを膝の上においたとき、心が通いました。そして箱の中のわが子に語りかけたりなりました。その時ふつと、そうだ、私はこのまゝ火葬場に持つて行つてゐるけれども、牧師先生にこの子のためにお祈りをしてもらおうという思いになりました。多分、神様が事務的にさつさと片づけてしまおうとしてゐる私をそのように導いて下さつたのだと思ひます。

それから教会へ行きました。

ちようど土曜日で、三、四人の方が会堂掃除をしておられました。その方達にも参列していたゞいて簡単なお葬式が始まりました。榎本先生は、伝道の番四、一、三を引照されて、人はそれぞれ神様からの使命がある。その使命を全うした時、私達は天に帰つてゆく。この子はこの世に生れることはなかつたけれども、この子なりに何かの使命を果して天に召れていつた。私達も神様の使命に向つて一直線に進みたいと奨めがあ

り、お祈りをしていたゞいて終りました。その時私は、これでこの子に対して父親としていくらかの義務が果たされたという安堵がありました。

その後の家内は、術後熱を出したりして真剣に祈られましたが、次第に回復してゆきました。けれども隣りのベットでは元氣な赤ちゃんが生れ、母親がうれしそうに世話をする様子を見ては、自らみじめになるのでしよう。早く帰りたいといふので、医師の許可を得て退院することにしました。

その朝、家内は何日ぶりかで家に帰れるといふので早くから荷物をまとめ、私に来るのを待つていました。そして担当医師やお世話になつた方々に挨拶をすませいざ帰ろうとしたところでまた多量の出血がありました。驚いてすぐ医師に見せたところが退院はとりやめになり、また荷物をほどかねばなりません。私もガツカリしましたが、家内の方は楽しみにしていただけに今にも泣き出しそうです。

私は思わず「主よ、まだこの暗きの中から出ることをお許しにならないのですか」と不足を言いました。ついで見ゆる所によつて悪く悪く考えてしまいます。そ

の時、

「あなたがたのうち主を恐れ

そのしもべの声に聞き従い

暗い中を歩いて光を得なくても

なお主の名を頼み

おのれの神にたよる者はだれか」

(イザヤ五十・十)

の御言葉が与えられました。

そこで私達二人は人目を避け廊下のベンチに腰かけて祈りました。そして最後まで神様を信じ、信仰に立つてゆこうと話しました。結局この出血は他に原因があつた訳ではなく、二日後に退院することができました。

約一カ月半ぶりに家族全員が自宅に揃い、もう一度新しく健康で生活できることのありがたさをしみじみと味わい、神様に感謝をさしげました。

今度のことは、神様が、仕事忙しい忙しいと聖書を読むこと、お祈りをおろそかにしていた私を、それではだめだよと窮地に追い込んで神様に立ち帰らせ、そして私の信仰を試みて下さったのではな

いかと思います。

主はわが力、わが盾、

わたしの心は主に寄り頼む、

わたしは助けを得たので、わたしの心は大いに喜び歌をもつて主をほめたたえる。

(詩篇二十八・七)

「神の国と神の義を求めて」

上 島 南 明

昭和四十八年九月末、私は退職勧告を受けました。

その日、仕事を終え、会社を出るとすぐに二階より「社長が呼んでいる。」と私を呼びましたので、戻つて部屋に入りますと、社長と役員二人が座つており、いきなり「聞きただしたいことがある。」との問いであります。

私が社長の許可なく、勝手な仕入、売上げをなし、不正を働き、会社の信用を失わさせ、会社に迷惑をかけており、社長として、これ以上、上島を信用できないということでした。営業活動を全て任されて、仕事を致しておりますので、日頃から十分な連絡が必要であることを、肝に銘じておりました。

社長には十分なる説明と、その都度必ず稟議書、報告書を提出の上、社長承認の決裁をいたゞいた後、業務をいたしておりました。

いきなり、ぶしつけな質問に最初は驚き、次に憤りを覚えました。承認捺印書類提示の上、時間をかけて

説明しました。しかし、その間中理解しようとか、疑問を解こうとする様子はなく、私の言葉じりを捕えては、説明するのに困るような方向へとむけていくのでした。しかし、社長捺印の上での決裁書ですから、私が勝手にしたことではないことは認めざるを得ません。そうなりますと、社長は「上島は正しい、まちがつてはいない。自分が悪い。だから自分が会社を辞める。」と言ひ出しました。私が驚いていますと、他の役員が（私は彼の紹介にて入社したのですが）「上島は性格が悪い。」と言ひだしました。「今迄、会社を辞めた人は、上島の性格が悪いのが原因であつた。」と。すると社長は「自分は上島の性格の悪さを早く直さなくてはならなかつた。」と言ひだしました。三人して、「上島の性格が悪い」と言ひだしたのでした。そして性格が悪いから辞めさせるといふ結論に達したのでした。私は今迄、信頼してきた人にもこのように言われようとは考えもしてませんでした。社員として説明すべきことはしたとして、非難に対しては、自己弁護しませんでした。私は、この人達を信頼してきたのかと、つくづく思い知らされました。

帰宅する間、彼らの声が耳から離れず、同時に榎本先生に無性にお会いしたくなりました。理由は一年前、先生に会社のことを話しました折、「南明さんは人が良いですねえ。社長、役員さんは御自分の利益しか考えておられませんよ。」と言われたことが、しきりに思い出されるのでした。当時、先生は何故こんな嫌なことを言われるのだろう。自分が信頼して、仕事をしているのにとりう疑問を先生にもつていたのでした。

夜も十時過ぎておりましたが、とりあえず報告までとは思ひ、先生へ退職勧告を受けられた報告を電話にて致しました。先生は「すぐに牧師館にいらつしやい。夜遅くともかまいません。遠慮なさらないで下さい。」と実に熱心に言われましたので、訪問させていたゞきました。先生は快よく迎えて下さり、私の報告に「あゝそうですか、あなたの役目は終わりましたね。」と言われ、お祈りしましょうと静かに祈られました。「長い間、祈つておりました兄弟を今夜送つて下さいませ、感謝します。どうぞ、この兄弟にあなたの限りない御恵みがございますように。」と祈られ、実にやさしく接して下さいました。

翌日、私は退職届を持参して出社しました。私は自分の机の前に行きました。すでに私の机はありませんでした。その上、私物一切なく、月々支払のため経理に預けていた生命保険書もありません。経理担当に聞いても知らないと言えただけでした。まだ退職届も出してないし、申し渡されてもいないのに。

私は目の前の光景をみて、激しい怒りを覚え、仰えるのに精一杯でした。

社長は今迄、私に何と言つてきたのか「自分の会社を創るのだ。経済的、社会的地盤をこの会社でつくってくれ。一日も早く、取締役部長になつてくれ。株の配当もしよう。何とか負債を返却できるようにしてくれ。その時は賞与を出そう。」と常々言つてき、この四年間、賞与を一回も貰わないまま、日・祭日、働くのを当然とし、この夏には負債の大半も返却でき、決算も黒字になつた今、性格が悪いつつて辞めさせ、私物まで隠すのか。私は社長に飛びかかつていきたいような衝動にかられました。とにかく気持ちを静めなくてはと思ひ、外へでて祈りました。只、一心に祈りました。祈つていくうちに、榎本先生の一昨日の言がは

つきりと耳に聞えました。「南明さん、あなたの任務は終りましたね。」と。私は会社へ戻り、まず社長の話を聞きました。「役員と相談の結果、君を退職させることにした。」といいました。私は退職届を出し、平静をとり戻していた自分をみだし、同時にこの人に信頼してきたのかとつくづく思いました。再度十分なる引継ぎ事項を伝達しました後、帰ろうと席を立ちかけると、退職金をだすと言いだし、八万円の手形をだしました。そして生命保険書類を返してくれました。退職金を手形で、わずか八万円を手形でだすこの人を見て、私はむしろ憐れさを覚えました。「長い間、お世話になりました。」と御礼を申し述べ会社を出ました。

家に帰り、一人で静かにしていますと、いろいろなことが思い出され、自分がこの四年間、打ち込んできたものは、一体何であつたかという問いが湧いてきて、同時に報いられなく、その上に全くの批判と恥かしめを受けたことと、明日からすることが何も無いことを考えると腹の底からにじみでるような憤りを覚え、寝れぬ夜が続きました。寝がえりをうつつは「チクシヨ

ウー、チクシヨウー」とうめき声をあげる始末でした。そして祈禱会へ導かれました。集会後、榎本先生が、私に近寄つて来られ「その後如何ですか。」と問われました。会社を退職しましたことを報告致しますと、「これからどうなさいますか。」と問われますので、「すぐに次の就職を決めるよう努力致します。」とはつきり答えました。すると先生は「何故ですか。」と問われました。私はアレッと思ひ、即座に「食べられなくなりまし、早く就職を決めて結婚したいと思ひます。又、私の会社は人数が少なかつたので、失業保険には、はいれないということが入つていません。早く就職を決めないと貯金もなくなつてしまいますから」と私は当然のこととして答えました。先生は「そうですか。」と不思議そうに私を見られ、「そういうことは聖書のどこに書いてあるのですか。」と問われました。私は返事に困り「働かないと食べられませんか」と答えました。しばらく先生は黙つておられ、私がおちつくのを見計らつて「あなたは今、聖書のどの御言が一番大切な御言と思われませんか。」と問われました。私は困つてしまい、いろいろと御言を探してみました。

が、思い当りません。黙つておりますと先生も黙つて何も言われませんで、私の返事をじつと待つておられました。先生の目は実に静かで澄んでおられました。私はその時自分が人を憎んでいることをよく知つていました。私は会社の社長、役員を憎んでいました。だから眠れないし、平安がないことをよく知つていましたので、私は『自分を愛するようにならぬ隣人を愛しなさい。』という御言を探し出し、先生に答えました。すると先生は、静かに、むしろ冷たく「南明さん、今の御言しか思い当りませんか。」と問い詰められる様子でたずねられましたので、私は困つてしまい、黙つていますと、先生は続けられました。「南明さん、イエス様は第一に何と言われているか。『まず神の国と神の義を求めよ。』と言われているんですよ。働かないと食べられない。結婚できないとは聖書にはどこにも記されてはいません。それはすべて肉の思いです。イエス様はまず神の国と神の義を求めよと言われているんです。今、南明さん、神様はあなたに休みなさいと言われています。そして神の国と神の義を求めなさいと言われています。」と実に毅然とした態度で言われま

した。その時の先生の御姿は全く光に照らされているようで、一言の言葉もはさむことはできませんでした。しばらくして先生に尋ねました。「神の国と神の義を求めよとは先生どうすれば良いのですか。」と。先生は一言「教会へいらつしやい。」と答えられ、「祈りましよう。」と言われ祈られました。教会を出て、第一に思つたことは、日頃あんなに優しい先生が本当に怒つていらつしやるようで、又、今迄何かと御相談した折にも決して、こうしなさい、ああしなさいと命じたことも、助言されたこともなく、只祈りましようと言つて下さつた先生が、今夜は『神の国と神の義を求めよ。』と言われ、「教会へいらつしやい。」と言つたままで別れてしまい、何か自分に落度があつたかなあと思つて帰りましたが、不思議と先生が「今は休みなさい。」と言われた言葉が幾度も私の耳に近づいてきました。今夜も又寝れないなあと思ひ、床につきました。翌朝、私は熟睡していた自分をみいだしました。「ああ、自分は眠つていたのか。」と気づき、「ああ、何と気分が良いのだ。」と思ひました。頭はボンヤリ、まぶたは重かつたのですが、その朝はすがすがしい気

分でいたのでした。

その日より聖書のマタイ伝一章より拝読しはじめ、『神の国と神の義を求めよ。』との御言の理解をしなくてはと思い、熱心に祈つたり、読んだりしていました。しかし、答えがみつからず悶々とした気持ちで御聖日となり、集会に出席しましたが、やはり解りません。しかし、私は心より先生の説教を聞かせていたときたいと願うようになり、先生の御用の後についていきたい気持ちで、当教会の集会には全部出席させていたことになりました。しかし、数週間経ちましても解りませんので、ある日伊規須先生へ『神の国と神の義を求めよ。』とは先生、私は具体的にはどうすれば良いのでしょうか。』とたずねました。先生は包むような優しいさで『私は神様の支配の中にあつて神様の御命令を聞くことだと理解致しております。』と答えられました。『伊規須先生、ではどのようにして御命令を聞くのですか。』とたずねますと、先生は『聖書を読んで、お祈りすることですね。』と答えられました。悶々としていた私の心に一つの光がみえる思ひでした。その頃、榎本先生が火曜日毎週、福岡の大蔵公園教会で

御用をされておられることを思いだし、『出席させていたゞいて良いでしょうか。』とおたずねしますと、先生は『今度のことを藤掛さんに話されてはいかゞですか。』と言われますので、都合のよろしい時におたずねして訪問させていたゞきました。その日は御聖日で、とても天気の良い日でした。空は雲一つなく、どこまでも高く広がり、空気はすみきつていました。教会から藤掛さん宅まで歩いて参りましたが、その時の藤掛さんの御姿は全く美しいばかりに輝いていました。『良いお天気ですね。』と言われ、平安に満されたその御様子に私の方も何かしら、ゆつくりとした気持ちにさせていたゞきました。応接間に通され、対座させていたゞき、『どうなさいましたか。』とやさしく問いかけて下さいました。私は自分のことを話させていたゞきました。『あなたの任務は終わりましたね。』と静かに語られ、哀歌三・三十―三十一『おのれを撃つ者にほおを向け、満ち足りるまでに、はずかしめを受けよ。主はとこしえに、このような人を捨てられないからである。』の御言を引用され、『全ての裁きを主にゆだねて下さい。静まりの時をもち、神様の御旨を

求めて下さい。しかし必ずや悪い方に悪い方に考えがちになることがあると思えますが、考えぬさるな。」ときびしく話され、「その時は、お祈りをなさつて下さい。」と静かに話して下さいました。そして御自分がこの御言でいかに強められたかのお証しをして下さいました。私のために静かに、力強く確心に満ちて祈つて下さいました。私は御礼を述べて帰宅しましたが、この御言を心の中でしっかりと握りしめて帰りました。当時私には、もう一つしなくてはならない問題がありました。年老いた母に会社を辞めたことを報告しなくてはならないことでした。三十二才になるまで、私の幸福のみを願ひ、具体的には私の結婚と会社がうまくゆくことのみを願つていた母でした。私は彼女を傷つけないよう、心配させないようにと考えると、話す勇氣が当初ありませんでした。しかし、今、神の国と神の義を求めて教会生活をしたいと決心したとき、私は母に会い話すことを当然のことと思えました。実家に行き母に退職した報告をしました。話し終えると「これからどうするのか。」とのみたずねましたので、教会へ行つて榎本先生の説教を聞いていきたいと話しま

した。すると母は「それは良かった。本当に良かったね。」と私をじつとみつめて、安心しきつた様子で言つてくれました。「あなたがどんなに一生懸命に働いていたか、仕事を終えて家に立ち寄つた時、あなたの眼をみ、声を聞いて良くわかつていました。あれだけ一生懸命やつてだめなのなら、辞めることが幸いです。私の方から教会へ行きなさいと言わなくてはならないのに、あなたの方からその言葉がでるとは……。全く何にも心配していないから、あなたのいうように教会へ行つて榎本先生の説教を聞きなさい。神様が必ずや恵んで導いて下さるから。」と話してくれました。教会生活をしていくうちに、私は今迄、自分がつていた信仰が全く安易で、只イエス様を自分に従わせ、自分のヘルパーとしてのみの信仰であることに気づきました。榎本先生の説教をとおして語られる神様の御言にふれます度に、力強く信仰生活に導びかれました。しかし、家に帰り、一人でボツンといるとき、何もすることのない時をもつとき、自分はこれで良いのであるのかという疑問が生じるのでした。

新聞、テレビ、ラジオはしきりに石油問題、紙不足、

品不足を報じ、近い将来にインフレがおそつてき、不況がやつてくることは多くの人に予知されることになりました。一日も早く就職を決めないと貯金もなくなつてしまい、食べることすら難しくなるぞという不安がおそつてくるのでした。一つの不安が起ると、それは坂道を転がる岩のように悪い方に悪い方にと考えていくのです。分つて、これではいけないと思ひのうです、自分の力ではどうすることもできません。「悪い方に考えぬさるな。その時は祈つて下さい。」との藤掛さんの言葉を思い起し、強められ、祈つて、祈つて、祈つて、時には往に頭をぶつつけ、頭を叩き、ひざやももを叩き叩き祈りました。ある時は走つて祈りながら、走つて教会へ行き、御言を聞いて平安を得、帰つて祈るといふ毎日でした。そうしたある日、私は「活水」の拓植先生の説教にテモテへの第二の手紙、第一章七節『神がわたしたちに下さつたのは臆する靈ではなく、力と愛と慎しみとの靈なのである。』の御言をいたゞき、この御言をしつかりと握りしめさせていだきました。ちやうどその頃榎本先生が「最近どうですか。」と問われましたので、このことを話しますと、

すぐに『活水』特集、拓植先生説教本を貸して下さいました。私は毎日、この本にて強められ、神様の生きておられることをひしひしと教えられました。へブル人への手紙十一・一『さて、信仰とは望んでいる事がある。』、十一・六『信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求めぬ者に報いて下さることとを必ず信じるはずだからである。』私は、この二つの御言にたたせていたゞいて信仰生活に励ませていたゞきました。

次号へ続く。

主は洪水の上に座し
主はみくらに座して
とこしえに王であらせられる。

(詩篇二十九・十)

数えて見よ 主の恵み

正野員子

「安息日を守つてこれを聖とし、あなたの神主があなたに命じられたようにせよ。」

榎本牧師の説教を聞いて感動した時、私はこの教会でと決心致しました。牧師館をお訪ねして、私を会員にして下さい。毎週は来られませんが、時々来ます。と軽い気持で言つたことが、とんでもない一時間余りの説教となつて、その時いたゞいた御言葉がこれでした。

この事は、今もつて説教の例話にされていますので、皆さん御存じですから、はぶきますが、みことばに従えば、無から有を呼びいだす天国ソロバンは、従つた者だけが知る妙味であります。誰もこれをうばうことのできない見えぬ祝福は、見ゆる物よりはるかに大いなることを知りました。

「賢き妻は主から与えられる」

長男の結婚の相手も次男の妻も、私は人に頼んだこととはありません。みことばを信じて待ち望みましたら、

二人共ドンピシャリの助け人が与えられました。祈りに勝ることを主がなして下さいました。

三男暢之も同じように信仰もつて祈つておりましたが、一向に与えられず。この人こそ主が与え給うたのだらうと思つてみると、違つており、同じ事が数度くり返され、そのたびに、がっかりさせられました。どうして祈りが聞かれぬのだらう、とうとう五年も待望みましたが与えられませんでした。そして、この人だろうと思つている人等は、どんどん結婚してしまいましたので、少々あせり気味になりました。

しかし、本人はいとも落着いたもので、よき信仰を持ち続けて動きませんでした。

そして新会堂が八分通りでき上つた頃でした。「僕新会堂ができたなら、第一号すぐ結婚式上げるよ」と。今まで何の話も聞かないのに、突然こんな唐突なことを言つたので、心に決めた人でもあるのだらうと、期待して、「相手の人はだれ？」と聞きますと、「だれか知らないよ」とケロリとしています。「相手なしでどうして結婚できるのね」と押返し尋ねました。すると、「僕祈つていたら、主はあしたの光のように必ず

現れ出るとおつしやつたから」と、みことばを確く握つて信じています。私は半信半疑でいました。

やがて一週間二週間経ちましたが、何事もありません。そして年は明け新年聖会の元旦の朝、再び主が暢之の上に臨み給うて、主がきめて下さつたから牧師に報告すると私に告げました。私は聖会が終るまで待ちなさいと止めたのでしたが、「神の時は今より外になし」と言つて、その確信は強く、私もたちたちとなる程、当るべからざるものが感じられました。もう止めることはできませんでした。

主の導きは、不可能を可能となして下さいました。

主が選んで下さつた女性に調悠子さんでした。誰しも将来牧師夫人になる人だろうと思つている信仰の女性を、愚息に下さるとは、考えられない事でした。そして予言の通り新会堂始めての結婚式で祝福されました。不思議なことに、悠子さんも暢之と同じみことばをもつて臨まれ、これからは暢之さんに仕える事が私の使命でございますと、私に話された時、私はうれし涙で、心の中で主を崇めてほめたゝえました。

私は思います。祈り始めた時すでに主の山には賢き

妻は備えられていたことを、まち望んだ五年間は二人共準備期間が必要であつたのです。暢之も無論その間急速に進歩させていたゞき、全く新しくなりました。

悠子さんも牧師夫人のお言葉では六年前牧師館に献身して来た頃は、料理洗濯掃除全くなつていなかつたそうですが、今ではどんな家庭に向けても恥しくありませんとおつしやいました。

おかげで私等は、お料理上手のお嫁さんをもらつて毎日の食事が楽しみです。

「あなたの靴を脱ぎなさい。

あなたの立つている所は聖なる所である。」

牧師夫人からいたゞいたみことばを守つて、台所にも祈り場として、事毎に祈りつゝなされる姿は尊く、我が家に神風が起りつゝあります。

主に仕える如く暢之に仕え、徹底した服従の精神は見上げたもので、姑に仕えること、ルツにも勝り、主は思う所願う所にいたゞく勝つた賢き妻を与えて下さいました。主に感謝すると共に、悠子さんを手放して下さいました。祈り始めた時すでに主の山には賢き妻に……。

「主はあなたのすべての不義を許し

あなたのすべての病をいやしあなたの命を墓からあがないだし……あなたの生きながらえる限りよきものをもつてあなたをあきたらせられる。」

神ゆの数々は数え上げることができません。特に腸之の貧血は人の血の半分しかなくかつた時、切なる祈りを聞こしめられ、入院してもいつ治るとも知れぬ重病人を瞬間にいやされ、再び一週間後検血して調べてみると、血液が二倍に増加する等、今も主は奇蹟をなし給り生ける主のみわざを見せていたとき、腸之の信仰の基礎となり、神には何でもできないことはないとい信じる者となりました。

信仰に入つたのは、人の導びきではなく、主は私の望みの絶え果てた暗黒の時、光となつて私の所まで下つて来て下さつて、「神は愛なり」のみことばを賜わり、キリストのキの字も知らぬ私を教会へと導びいて下さいました。そして滅びの中より生命を与えて生きる者となして下さつたのみか、一家六人が次々に救われ、今ではそれぞれの家庭をもつて主に従つて歩いておりますことは感謝です。

「主イエスを信じなさい、そうしたらあなたもあなたの家族も救われます」

その御約束の通りになりました。日々みことばのマナをもつて飽きたらせて下さいます。何たる恵み、何たる神の愛でしよう。罪とがが許されたのみか、最上のもので楽しませて下さるとは……。

「あなたがたのうち働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であつて、それは神のよしとされる所だからである。」

このみことばは、私が下半身をやけどして、一年余り床に伏している時与えられたみことばで、その試練の中で言うことのできない主の慰めを受けた御恩寵の時でありました。

その中で自分の非を悟り、悔改め、決断しました。只々みことばを信じて、繁昌している店を人手に渡し、主におまかせ致しましたら、主は、すばらしい所において下さり、仕事から解放されたのみか、みことばの如く、私共に最も善き嗣業を与えて下さいました。これからどのように導いて下さるか知りませんが、

「神のことは、皆真実である。神は彼に依頼む者の盾である」

本年いたゞいたみことばですが、みことばに依頼んで、信仰に歩んで参りたいと思つております。

最後のみことばをもつて、栄光を主に帰したく存じます。

「あなたがたの救われたのは、実に恵みにより信仰によるのである。それはあなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行によるのではない。それは誰も誇ることがないためである。」

アーメン

その怒りはただつかのまで、

その恵みは生命のかぎり長いからである。

夜は夜もすがら泣きかなしんでも

朝と共に喜びが来る。

(詩篇三十・五)

ヒヨコのヒヨコ

安 東 篤 良

昭和四十九年一月三十一日(快晴)

前日からの総合監査で朝から曾根農協に出張していたが、午後は講評のため帰庁する。しかしまだ電話をすることができない。今朝妻から「藤下先生(妻が入院していた産婦人科医)にお電話をして下さい。」と電話があつた。：：：がどうも心の内がすつきりしなかつたので受話器をとることができなかつた。

妻は昨日(三十日)朝破水し、出産予定日を二日過ぎて入院していた。

昨年十二月、お腹があまり大きいので、双児ではなからうかとレントゲンを撮つた。その時医者から「胎児も大きい骨盤も大きいから大丈夫、産めますよ」と保証されていた。私共も普通のお産を疑わなかつた。：：：それが、今朝になつて「破水をしているのに、陣痛がなく、胎児も下らない。陣痛を起す注射も全く効き目が無い。：：：手術をすることになるかも知れな

ス」とさう。

「お腹を切る、まちがえば死ぬかも知れない」

妊娠・出産ということが、一人の生命がこの地上に産れ出るということが、今まで想像していた壮嚴さという以上に、この現実の何と厳しい事かと感じさせられる。

仕事が一息つくと気になる。その度に今年の標語

「主は王となられた」のみことばに支えられなければ任ねなければ、自分にはどうにもできないのだと祈る。

「電話をしなければならぬ」。昼の時間が近づくにつれてあせりが出てきた。

「自然に産まれることを、しかし子供が産まれることがだめなら妻だけでも助けてほしい」と願ひ、「神様に信頼すれば、どのような中でも助けて下さる。」と自分に言いきかせている。……でも信じ切れないのだ。

前日の祈禱会での聖言は「だれでもわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にとどまっているならば、何でも願うところを求めるがよい、そうすれば与えられるであろう」(ヨハネ一五・七)であつた。「求めよ、さらば与えられん」……求めてい

る……しかし信仰が持てない。

自分に「この聖言があるからこれでいい」と言いきかせても、すぐに不安は頭を持ち上げてくる。……また祈る。……ハッと聖言の前段に気がついた「つながっており……」。「そうだ、主が私につながつて下さつてゐる、妻につながつて下さつてゐる……だつたら問題は無い、後は大丈夫」と信頼することができた時「主は王となられた」のみ言は、スーツと心にはいつた……平安。

午後一時半、藤下医院に電話をする。曰く「一ヶ月前と比較して、頭も大きくなり、本来ならばもつと下がるのですが、下らず、破水もしておりますので、このままですと母体も危いので、製鉄病院の産婦人科部長とも話しをして、手術をした方が安全だと思ひますので、ご主人の了解を受けてと思ひまして……手術は今日午後四時から、製鉄病院の麻酔科部長と産婦人科部長と三人でしたいと思います……」

「生きるも、死ぬるも神様の手の内」主はこのこと「王となられた」から大丈夫」と何の不安もなく先生に「全てをおまかせします」と答えた。

午後二時過ぎに監査の講評が終つたので、上司に妻の手術を告げて休暇をもらひ病院へ行く。：：二時五十分に着いた。

青白い顔、疲れきつた目に心なしか笑を浮べて私を迎えた。ベットにもたれかゝつていた。そこにはベットが二脚、看護婦と母（妻の）とがいた。

最後の注射をする。：：いよいよ手術がはじまる。

一瞬の不安が横切る：「お祈りして」手術室へ導こうとしている看護婦を待たせてお祈りする。：「さあ、イエス様が付いて居て下さるから、元気を出して！と励まし階段の下まで送り、手術室へと見送つた。

手術室の入口で立ち止り、私たちの方をふり返つてほほ笑んだ姿に「もう二度とこの生きた姿で見ることができないか知れないのだ」：三時二十八分だつた。病室で待つ母と私、やるせないような気持の去来する中で、交す言葉もなく、ただ手術の無事に終ること祈つていた。

四時十二分、廊下の端の方、ナース室からの騒がしい足音に廊下へ出た。

「産まりましたよ！ 坊やですよ」病室の窓から見る空は、真冬だというのに春のように暖い雲一つない天気だつた。

「神様、妻もどうか守つて下さい」

四時半、看護婦に案内され、ナース室で我子に初対面、保育器の中で、割と大きな、赤いシワの赤ん坊が口から泡を出し、左目を開け、まぶしそうに天井を仰いで寝かされていた。

「三、八二〇グラムです」

榎本先生と大分の母に電話をした。四時四十分だつた。

家内が三人の看護婦に抱きかかえられて病室へ帰つて来たのが五時二十分。目は開け、意識はあるが、やつれていた。

「男の子だ、元気だよ」

「よかつたね」

苦しそうな顔から、強いて笑顔を造るようにして答えた。

五時三十分、院長回診の折、吐きそうな様子に受皿を口に持つて行くと、黄汁の中に血液の混つたものを

吐く。絞るような吐気による腹痛のため、精一杯顔をひきつらせて吐く。「血は麻酔の時、咽に管を通した時の傷ですから心配いりません」と院長。

夜七時、榎本先生御夫妻、見舞に來て祈つて下さる。子供が最初に合う最もすばらしい人、感慨無量だ。五分頃院長が子供を抱いて病室へ來た。これが初めての母子対面であつた。

その夜は解熱剤を加えたリングルの点滴、三時間おきの痛み止めと、出血止めの注射をする。

麻酔も次第に消え、意識もはつきりし、お腹の痛みが静まる時折りの間、子供の名前について話す。子供の名前については、かねてから祈り伺つていたが、お腹に居た時の仮りの名は、私共の媒酌人伊規須先生から無断借用して「信太郎」と呼んでいた。それが二十八日出産予定日の家拝の折の聖書の一節で心に残るところがあつた、それで家内に「名前については三つある。一つは『信太郎』。一つは、現在の伊規須先生からすれば『惠太郎』の方がいい。もう一つは二十八日の家拝、歴代志下十四章から『よりゆき』託往』がある。どうするかね」

しばらくして「『託往』がいいと思います。」
「じゃあ決つた『託往』にしよう。」そして感謝した。夜十一時五十分だつた。

翌二月一日、伊規須先生が來て下さつた。

『託往』三人目の最もすばらしい他人に会つたわけだ。昨日の榎本先生御夫妻といい、伊規須先生といいこの子にとつて最も良い方にお目にかかつたと感謝で一杯だつた。たとえ私共の両親が來てくれたとしてもこの平安と喜びはない。

伊規須先生と二人でのぞいたナース室の「託往」は丁度入浴時だつた。黒緑色の便の付いたオムツをはずし、十センチ程のバンソーコーでへその尾を貼りつけたお腹にタオルを覆い入浴。

「ギャー。」

「元気のいい赤ちゃんですよ」と看護婦さん、大きな声が印象的だつた。

午後、大分の両親に電話をする。「名前は普通はお祖父いちゃんにつけてもらうようだが、こつちで『託往』と決めましたよ。」「お前達が両親だから、呼びやすければそれでいいよ」と理解ある答だつた。

夕食と入浴をすませ城野に帰り、今夜の禱告会のために靈感賦・禱告簿とカセットを、また、元訳聖書と洋白紙・サインペンを持参し、命名を記す。

妻は夕方からガスが溜り、腹が張の、切り口が痛むという。もうすぐ七時半、ここから教会までは二、三分だが、早くしないと禱告会が始まる。目前に苦痛にゆがむ妻の顔を置いてはいけず休む。

「ウーッ、ババお祈りして」「イエス様助けて下さい。『主は王となられた』あなたがこの中から助けて下さることを信じます。み名によつて、アーメン」：
：：こうして何回か祈る。

時が経つにつれて、腹の張りは大きく、痛みの週期も短くなる。夕方七時頃、ガスの出を早くするため腸のぜん動運動を活発にする注射をしたが、このためか腹はゴロゴロ鳴り、ガス塊が上へ下へと動き回り、これが張つたお腹の傷口を破るように痛める。その度に「ウーッ、ババお祈りして」苦痛にゆがむ顔の中からしぼり出すような声でいう。「イエス様：：：」祈つてゐるうちに必らず静まつてくる。

ガスはまだ出ない。午後十時、痛みの止んだ少しの

間を見て教会に電話をする。百合子先生が出られた。「祈つて下さい、ガスが出ません」

二日になつた午前三時、当直の看護婦さんと呼ぶ。

「痛み止めの注射をしましょうか」「手術後の回復が遅れるのがいやだから」と妻は一度は断わるが、四時半ついに注射をしてもらう。「主は王となられた」のみことばに全てを投げ出す。

そして十分後、腹の音はコロコロからグルグルに変わり、下腹の方だけにする。便が少し出た。注射のためか吐気を訴える。横にしてやるとゴポーツとガスと共に茶色の液を吐く、看護婦は婦長と院長を呼ぶ。「あ、あそりですか、もう少しの辛抱ですよ。」と励ます。しばらくして、又オムツを取りかえて、いくらか楽になつたのかなと思つたら、吐気という。横にしてやると、又ゴポーツと吐く。その時・ブオーツ。オナラ一発「出ました」「出たよ」「出たねえ、出た：：：」「よかつたね」と涙声。「感謝しよう。イエス様：：：」そのまま感謝した。主の手の内にあつて、自然分娩のすばらしさと、あの手術室へ入つて行つた廊下での後姿を思い出した。

妻は二日の朝になつて、やつといくらか眠ることができたという。しかし、夕方またガスが溜りはじめた。腹は張るし、傷は痛む。昨夜のは腸の下の方にあつたのが出ただけで、腸全体はまだ通じていないのではなからうか……。」「パパお祈りして」、「イエス様助けて下さい……」

八時半頃、「ブオーツ、ブリブリ」ガスと便が多量に出る、僕が自分でオムツを取り変えようとしたが、多量なのと要領が悪く看護婦さんと呼ぶ。やつと気分そう快、人間らしい気持になつたという。

二月三日（日）になつた。今日から努めて起きる、といつても座イスでベットの上で上半身を起すだけだ。乳が張り痛むので搾乳機で搾り出す。まだ授乳する力はない。

翌四日。手術後、初めて床に立つ。イスとベットに両肘をかけ、中腰の姿勢で、初めて自力で排尿ができた。感謝！

午後、区役所企救出張所へ出生届を出す。「難しい名前ですね。何とお読みするんですか」「よりゆきと読みます。聖書から採りました」「当用漢字にありま

すか」「ありますよう」

届けをすませて病院に帰つてくると、丸山町の母と鞘ヶ谷の長姉が来ていた。託往の少しのあせもを見つけて出し、丸山流経験主義をふり出し、「衣物がどうだ、ベットがこうだから悪い」「いいえ、ちがう、こうしなければ」と。二人で託往をおもちやのようにひねりまわしている。「私共の子供です。横から口を出さなくて下さい」と言いたかつたが、何とかしてあげたい、と思う気持からのことだろうと考え直し、やつと我慢した。……しかし母達が帰つた後もなかなか素直になれなかつた。

私共は全く白紙でこの子を養つていく。分らない所は全て祈り乍ら、教わり乍ら、主によつて自らの手で養育して行きたいと願つていた。そんな矢先に母や姉の幅をきかせた断定的なやり方いらだちを感じていたのであつた。夕の家拜で歴代志下二十・三により、主を崇めさせていたゞき平安が与えられ、母達のため祈つた。

五日、夕方祖母が泊りの準備をして来た。私が手術の日からずつと泊り込み看病してきたので、疲れただ

ろう、代つてあげようと言うことだつた。妻は「おばあちゃん、用はないんだから帰つていいよ。パパがいてくれるから、早く帰んなさいよ。」：：父母に泊ると言つて来た手前か、なかなか帰りそうにない。「私疲れて眠るから早く帰つて」半ばじやまだと言われて、特別がつかりする様子もなく帰つた。「おばあちゃん、がいても、ムシヤムシヤ食べているか、ベチャベチャしゃべるか、ガサガサ動きまわつて、こつちが眠れなく、疲れるばかり、でもあなたがいてくれると、用足しの時にも祈つてくれるから安心するの」と祖母が帰つて話してくれた。

六日、今日から立つて自分で身の回りのことをする。私がかねてから子供の為には母乳が一番いい、だから少し位努力すれば、母乳は子供に必要なだけが出るはずだし、第一経済的だ、と思つていた。それで今夜から母乳だけで決心する。子供も腹が減つたら吸うだろう、吸えば次第に多く出るようになるだろうと思つていたから、母子共に軌道に乗るまでの辛抱と決意し、祈つて始める。

始めは午後十一時から看護婦さんに要領を教わり乍

ら、できるだけ腹に子の体重がかからないようにと足を出し、乳房の張りのある方から、マツサージ（乳頭に向つて円型を画き乍ら）、次に、ほう酸水で拭き、口にくわえさせる。この時他方はタオルを当てておく。（片方を刺激すると他方も乳汁が出るからだ）こうして飲ませる。大変に疲れる。特に傷跡を圧迫するのが耐えられない様子、正座をして膝の上にくくらをのせて飲ませてみる。これも腹部を押し、傷口から出血したような気配にやめ、ついに横になり寝て授乳する。大分楽なようだ。子供が五秒位吸つては休み、また吸う、のくり返して、一段落するまで一時間かかつた。午前一時半からまた一時間。六時半から一時間。：：一夜の試みは朝と共に終つた。母子共に疲れて、なお託往は不満なのか泣く。看護婦の推めてミルク七十ccを与える。全部飲む。

「ミルクよりも母乳で」という私の意固地の犠牲者、母と子は疲労の夜明を押しつけられたのだつた。その時、「はつ」と気がついた。私は「母乳ばかりで養いたい」にこだわりすぎた。自分はいつしか、こうでなければならぬと決め、それが最高だとし、偶像とし

ていた。王としていた。：：「イエス様ごめんなさい」のです。

：：後で看護婦さんのいうには「この赤ちゃんには母乳だけでは足りませんよ！両方を使つても自然と母乳が出るようになるから大丈夫ですよ」と。：：「ごめんね、ママ、よりゆきくん」

それから二日目（九日）抜糸。そして手術後十九日目（十八日）傷のガーゼ取り除く。三月一日退院。：

（入院期間三十日）

そして一年、よりゆきも体重十二kgとなり、集会では奇声を発し、はいまわり、妻も皆様の祈りに支えられて、ここまで快復させていたどきました。

この出産入院に付き添つて、排便、尿の準備、処理徹夜から二時間、四時間しか眠らなくても、夜中は、「パパ」と呼ばれ、又妻の手足を動かす音に気付いて起き、額や体の汗を拭いてやる時、眠いとか、きついとかいふことはなかつた。

こんなことをするなど考えてもみなかつたのに、又一人の時の自分には顔をしかめて逃げ出しそうなことを、ほんとうに感謝し乍らさせていたどいた。イエス様が共にいて下さる平安と喜びがそうさせて下さつた

わたしは安らかな時に言つた。

「わたしは決して動かされることはない。

（詩篇三十・六）

すべての聖徒よ、主を愛せよ、
主は真実な者を守られるが、

おごりふるまう者にはしたたかに報いられる。

（詩篇三十一・二十三）

指しやぶり奮戦記

正野真宏

早いもので長女のぞみも七才になつた。兄貴の謙一に毎日鍛われてか、女の子らしく人形あそびとか、ご本を読むということには、あまり興味を示さず、角力を取つたり、ふざけてキヤーキヤー言うのが好きである。それでは男の子のように気が強いのかというと、その反対で、末つ子の甘えも手伝つて泣かない日はない。すなわち、暴れているか泣いているかのどちらかで、いずれにしてもにぎやかしい。

そののぞみに一つ悩みがあつた。

この年になつても、指しやぶりがやまらないのである。生後数カ月後からだから七年間は吸い続けていることになる。その内にやまるだろうと安易に考えていたのがいけなかつた。小さい時に少々無理をしてもやめさすべきだつたと今になつて後悔する。

成長と共にやまるどころか、さらにひどくなつた。

三才児健診のとき、医者から今やめないと下アゴが合わなくなつてステク口になつて困るよと言われた。

私達も何とかやめさせようと思ひ、吸う親指にホータイをしたところ、反対の親指を吸う、ではその指をもと、ホータイをすれば、他の指を吸う。えーい、いつそ全部の指を一網打尽だたくつてしまふと、足を吸おうとするし、第一それでは生活に不便であるのですぐ自分でのけてしまふ。それに寝る前はおしやぶりにしないと精神が安定しないらしく寝つかれずにぐずぐず言いだしてしまふ。

そんなにまで苦しい思ひをさせてまでやめさすべからうかと情に負け、親の方がまたもや妥協してやめてしまつた。こんな仕末である。親子して根気がないではやめることはできない。その内に「まあ指しやぶりを開いてしまつた。」と悟り

ところがある。最近になつてのぞみの上と下の歯がかみ合わず、ステク口の徴候が出てきた。医者も予言のとおりである。指を吸つて回虫がわいても、指がふやけても何とか手だてはできるが、顔の変形だけはどうしようもない。その内に年頃となり、揚杞妃が恥じ入るほどのしとやかな美人になつても、ひどいステク口

で切つたスイカを下アゴでかむようにして食べた
ら、それこそ百年の恋もさめてしまう。その時娘は、
「どうして小さい時に治してくれなかつたの、これで
私の一生は台なしだわ」と私を責めるだろう。その時
何と答え得よう：：なんて、そこまでは考えないに
しても親の責任である。何とか方法を講じなければなら
ないと、まだまだあの手の48手、ある時はなだ
め、ある時はきびしく、柔剛とりまぜての追放作戦も
ことごとく失敗に終つてしまつた。結局は本人の自覚
を持つほかはないのだ。

小学校に入学してからは、さすがに学校では我慢し
て吸わないようになつたが、その反動で家では四六時
中吸うようになつた。注意するとさつと引つ込めるが
ものの五分と経たない内に無意識に手が口へ行く。ま
た注意する。

本人も何とかやめたいと思つてゐるのだが、弱くて
それができないらしいのだ。寝る前のお祈りにもやめ
させて下さいと祈つてゐた。自分でやめると言つて二
日ほど我慢したこともあつた。だがやめるまでにはい
たらぬ。七年間吸ひ続けたこの習癖は、こんなにま

で頑固に小さな体の奥底までしみ込んでいるのか。
あれは正月の三日だつた。この日は正月休みで子供
の相手をしてゐた。例によつてのぞみが指を吸いだし
たので注意した。そして、よせばよいのに「今度吸つ
たらお指をチョン切るよ」と言つたのである。そもそ
も事の起りは教育上かなり問題があるこの発言から幕
が開かれることとなつたのである。

まず、のぞみが「いいよ、いいよ」と同意した。勿
論真剣に考へてのことではない。横にいた謙一が証人
となつた。それから一時間ほどたつて謙一が「のぞみ
が指を吸つてゐた」と言つて連れてきた。その時は私
がのぞみは無意識に手が口に行つたのだから今度は勘
弁してやろうと弁護して釈放した。

ところが十分も経たない内に、また現行犯で逮捕さ
れて来たのである。のぞみは吸つていないと泣きなが
ら弁解するのだが、謙一の追究はきびしく、とうとう
認めざるを得なかつた。謙一は「さあ、パパ、約束だ
からのぞみの指を切ろう」と今度は私に迫つて来た。
のぞみも勘念して「いいよ、いいよ、切つてもいいよ」
と中端やけくそになつて手をさし出して来た。

困つたのは私である。親たる者愛する娘の指が切れるはずがない。それで弁護しようとする、この小憎らしい八才の鬼検事は「パパ甘い！」と執ように喰い下つて譲らない。(ケンイチではなくケンジと名前を付けるべきだつた。)

「約束だから」という正当論だけに相手は小さくても無視するわけにはゆかない。そのまま一方的に許せば、約束は守らなくてもよい、ごまかしてもよいと自ら子供に教えることになり、検事の納得は得られない。それはまた親に対する信頼をそこなうことにもなる。私はまるでシエークスピアの「ベニスの商人」に出てくるあの女裁判官と同じ立場に立つてしまった。

ああ、あんなことを言わなければよかつたと今さら後悔したところで何の足にもならない。さあ、どうする。何かソロモン級の知恵はないものかと子供の前で立ち往生してしまつた。

その時、祈るべきことを示された。そこで私はのぞみちゃん、けんちゃんと一緒に神様の導きを求め、どうすればよいか、できればのぞみちゃんを許してほしいと祈つた。祈り終つてから「のぞみちゃん、この指

神様に捧げよう。切られても仕方がないお指だものね。きつと神様が許して下さつてお指を潔くして下さるよ」というと、のぞみはしゃくりあげながら「うん」とうなずいた。私は改めて神様の祝福を祈つた。「のぞみちゃん、よかつたね、この指は新しいお指だ。神様が下さつた深いお指だよ。もう前のくさい指はなくなつて、新しい指を下さつたのだ。だから、またお指を吸つてくさくしたら申し訳ないものね」

のぞみは明るい表情になつて、今度は力強く「うん」と言つた。私はもう一度神に感謝し、再び吸わないように力を与えて下さるよう祈つた。のぞみは「アメン」と言つた。それは心からのアメンだつた。鬼検事も祈つてくれた。

私は、これはきつと神様が応えて下さると感じた。はたしてのぞみの指すいはそれ以後止つたのである。

実のところ、私は不信仰にも夜が心配だつた。昼間は意識してやめることはできても夜は別である。それで夜のぞみが寝ついた頃、そつとのぞいてみると、いつも入つているはずの指が入つていないのだ。私達は歓喜した。

翌日、勤めから帰ると、のぞみが私の腕の中にとび込んで来て「ババ指すい治つたよ。見て、もうくさくないでしよう……神様が下さつたお指だものね」という。

やめたい、やめたいと永いこと思っていた指しやぶり、何度も決心し、小さいながら努力してもやめられなかつた指しやぶりが治つた。余程うれしかつたのだろう。私は頭をなでてやりながら、もう一度神様のあわれみに感謝した。

ちようどその日、職場の方から帰郷した時のお土産といつて秋田こけしをいたゞいていたので、「ごらんのぞみちゃんに神様に従つたのでごほうび下さつたよ」といつて、それをあげると、彼女は早速これに「のぞみがおやゆびをやめたきねん」とマヂックで書いた。

このこけしは、のぞみにとつて感謝の「エベネゼルの記念碑」(サムエル上七・十二)である。それはのぞみの親指にも似て相応しい。それはまた、永い間の一家の祈りに応えて下さつた記念碑でもある。

最後になつたが、考えてみると私を責め上げた小さな鬼検事も神様に用いられていたのだつた。ありがと

り、ケンジいやケンイチ君。

すべて主を待ち望む者よ、
強くあれ、心を雄々しくせよ、

(詩篇三十一・二十四)

悪しき者は悲しみが多い

しかし主に信頼する者はいつくしみて囲まれる。

(詩篇三十二・十)

全地は主を恐れ、

世に住むすべての者は主を恐れかしこめ

(詩篇三十三・八)

藤 掛 邦 夫

私は二十三才で救にあずかりました。そして大きな恵みを受けましたが、一寸、この事を申し上げぬとわからないのでお話し致します。実は、二十七才の時、京都で天皇陛下の即位式がありまして、そのメニューを造つて宮内庁に納める仕事を致したのであります。之が私の大きな恵みをうける動機になつたのです。

市場に魚が入るのが、晩の十一時で、それから食事の献立が定るのが夜中で、朝の九時までには造つて納めるという大変な仕事を致しました。一週間、心の負担と肉体の負担とで眠る事もできぬ状態でしたので、体はガタガタになつてしまいました。眠気をさます為には、好物のカキ餅を食べて過しました。

やつと、一週間の仕事を終つたのですが、体はずつかり駄目になつておりました。

京都の佐伯先生（佐伯病院長）に診てもらいましたら、「これは立派な胃潰瘍だ」と診断されたのであります。翌昭和五年は倒れ乍らも皆さんの要求に答えて

仕事をさせて頂きました。そんな中でしたが、三月には長男が与えられました。家内と三人で、何とか神の栄光を拝したいと願ひ集会にも励みました。

先生の所にピツタリとついていて、先生の息子の様に思われたり致しました。

ところが、十月にはどうにもならず、当時「半年持てたら良い方だ。」と言われ乍ら、一年もてたのですけど、もう一辺、先生の意見を聞きたいと参りましたら先生は、「既に此処で仕事をしている事自体が無理なのだから、郷里に帰つて日当りの好い家でも見つけて養生した方がよい。而し念の為に言つとくが、医者立場からみてもどうにもならぬのだから、覚悟はしときなさい。」と言われました。

十二月一杯で、受けた仕事を全部終り、後は片づけて藤村先生の息子、登さんにまかせて、正月二日寒い朝でしたが、家内と子供で北風に追われるようにして予ねて頼んでいた日当りの好い家が隣村にありましてそこに引越しました。それもやつと気力丈けで動いている有様でした。後から聞いたのですが、近所の方が私を見て、「気の毒に、死神につかれた人のようだ」

といつていたそりでありす。

仕事も教会も離れて、もうそれ以上起きておる事ができません。だんだんと悪化しておまけに痔も悪くなり、出血がひどく、愈々苦しみ続けておりました。家内が京都佐伯先生の産婆学校の出身で、産婆の免状がありましたので、産婆の仕事をし乍ら家計を助けてくれました。田舎の事ですから、山越え野越えして仕事はいつも馬に乗つて参りました。家内が仕事に出ますと帰る迄が大変で、赤ん坊に乳をのませるのに寝たきりの私は、弱い体ではつて回つて乳を造つてのませました。

私は、「天のお父様、何故こんな事に逢わせ給うのですか？」と祈りました。「十字架の上には贖いが成つてゐるのではありませんか。」と、恐れ多い事を申し上げて祈りました。しかし神様は、ウ・ンともス・ンともご返事はありませんでした。しかし私は、神様を離れようとか、信仰を捨てよう等は決して思いません。只その中にあつても何とかして主には従いたいと願つておりました。当時、家内三人で、私は寝たきりで家庭で礼拝を守り、讚美歌を歌い、又祈りを致してお

ました。

半年か七カ月位経つてから、父が来て一緒に礼拝をするという事になりました。それで何とか坐つて礼拝ができるように力を与えて頂くようにと祈りました。何かしら心にさゝやくものがありました。私は赤ん坊と同じ四つんばいになつてガラス障子の所まで行つて太い棧に手をかけて体を起しました。その時主が私に力を与えて下さつて、半分起ちました。もう一つ高い所をつかまつて立ち上つたのです。病は罪から起ると柘植先生はよく言われました。只、名誉心とか、徒しいほまれのために、一週間の間、神から与えられた体を無理をして、その上お祈りもしないでやつた事で、人間の力では到底何もできもしないものを、肉の力でやつて来たのですから、愈々悪くなるばかり、そうしている中で寝ている時に人間の限界を知つたのであります。

又、病氣は罪があるからだけど、罪が清められるなら病氣は治ると信じたのであります。

到々その様にして父が来る前に、起上る事ができまして、心から贖の血汐を崇めました。

このどうにもならぬ体に力を与えて下さつた御血をもう一度心から崇めて、「主よ、有難うございます」と讚美と感謝を捧げました。

そして、願つた通りに寝床に坐つて礼拝を守る事ができました。この様な礼拝を捧げたことは、五十年間初めてという程に主の血をさんびして礼拝を致しました。御血を崇めて祈れば、血汐の故に罪が許されて、病氣も癒される事をはつきりと悟りました。親しい方々の中から離れて、一人で戦わねばならぬような時にも、どんなに苦しい中にも、私と共に主がいて下さつた事をはつきり申し上げて憚らないのであります。確かに主が助けて頂いてこの中を通過する事ができました。

私の力も、意志も、何の役にもたちませんでした。主は血汐したるみ手で帰れと招いて下さいました。「汝の願は何なりや……」との聖言にあるように、確かに私の申し上げた通りに主がして下さいました。神様があるとか無いとか言われる方もありますが、確かに神がおられて、この私をも願みて下さるといふ事はつきり申し上げ、神には間違いないことではないと

申上げる事ができるのであります。之が私の土台であります。佐伯先生が駄目と言われた胃潰瘍が少しも薬は用いませんが、今日まで数十年、一度も胃が痛いという事はありません。

ホーレン草の裏ごしと、玄米飯を一口三十五回づつかんで、ド・ド・ドにして食べるように佐伯先生に言われて、その通りに玄米を石臼でひいて粉にして団子を造り、三十五回かんでおると、解けて無くなる位でした。それが全く一カ年で完全に医されました。又もう一つ、痔の出血の為に、余りひどく出るので、血の気が無くなり恐ろしい有様でした。何しろ便所が真赤になつてしまふ程の出血でした。

しかし、たとえ私の体の血が一滴も無くなつても、キリストの十字架の血が私に入つて下されば問題はない、と信仰を持たせて頂いたので全然恐くなくなりました。もし、召されても主のもとに行く、もう終りかと思つていたのが、すつかり強められて今日この様に皆さんの前に立たせて頂いております。弟が製薬会社をしていましたので、増血剤をくれたりしましたが、それも余りのみませんでした。それが、それ

も余りのみませんでした、それがこの様に全く驚くべき事を主がやつて下さいました。そして昭和二十七年福岡に来まして、リンレイ佛とビル管理の二つの会社を、神の恵みと憐みによつて、どうにか後の者がやつて行ける所までになさしめて下さいました。本当に神の恵みでございます。私の願います事は、何とか主の潔きにあずかりたい、このようにして下さつた主の栄を顕わして頂きたいと、私としては一生懸命やつて来ました。それで、

「わたしの恵みはあなたに対して十分である。」

(Ⅱ、コリント十二・九)

これまでの中にも主の恵みは私に十分に注がれていたのであります。ですから、私が皆さんの前に誇れるのは、弱い私に対して主の力がこの様にして下さつたので、何一つできない私、少しもなつていない自分、何物も持たない、力も金銭もなく、世の人からほめられる何物もないのですが、只一つ、私にはこの救われた恵みがあることであります。大正十三年八月に救われて、今日ここまで保つて下さつた神には確かに間違いないが無いという事でありませぬ。

之丈けが私の誇り得るものでございます。
以上が私のお証しでございます。

18・53・2・19

(於 八幡前田教会礼拝)

主が仰せられると、そのようになり、
命じられると堅く立つたからである

(詩篇三十三・九)

主のはかりごととはとこしえに立ち
そのみこころの思いは世々に立つ

(詩篇三十三・十一)

編 集 後 記

はじめに、この原稿は昭和五十〇五十一一年におあずかりしたものです。発行が今日まで延び延びになりました事、お詫び申し上げます。

その後一・二編加えさせていただき、ここに十一号として発行することができましたこと、ルカ伝十三・八のイエス様のとりなしを思わしていただき、感謝でいつばいです。

編 集 者